

こどものころの話はよく書ける。

歳をとると、または認知症のけがでてくると、最近のことは忘れるのに、昔のことは覚えているといわれますが、そういうものかもしれません。

ということは、こどものころのことを書くと、ぼく自身が歳をとったことを自覚させられるというわけですが、それでもこどものころを書くのはとても楽しい作業です。

いまから想えば、たいへん貧しくひどく辛い時代だったはずなのですが、不思議なくらい懐しい。

それで性懲（しょうこ）りもなく、おばけの話をまだまだ続けるということになります。

ごかんべんください。

思い起こせば、古今東西のおばけの話を手当たりしだいに読んできたけれども、みんな主人公も作者も、おばけをこわがって書いている。もしかすると読者をこわがらせるために、主人公も作者もわざとこわがっているのかもしれないが、君が読んでいる（あるいは読もうとしている）この話は、主人公も作者もあまりおばけをこわがってはいない。

あるいは、初めはこわがっていても、そのうちこわくなくなる。

なぜなら、おばけとは、本来そういうものだからです。

昔、〈おばけを守る会〉を主宰していた平野威馬雄（ひらのいまお）は、おばけについてこういう言葉を残している。

【あの世に行って、神にもなれず仏にもなれず、いつまでも迷いつづけ、しきりと生きている人間を恋しがっているというわけだ。だから、まことに人なつこいものなのである】

おばけかなああおばけかなおばけかな

禿光山人

+ 2 1 【ほねほね】

村そのものが貧乏だったのですが、とりわけぼくの家は貧乏でした。いつもろくなものを食べていないから、ぼくの腹のなかで何者かが、腹へった腹へった、としょっちゅういうのです。

はらはらはらはら
はらへったったた
はらへったったら
はらはらへったた
へったたはらはら
はらはらへったた

ぼくはわれながら辛抱強いのが取り柄ですし、苦勞だらけの母親に文句をいったこともないのですが、ぼくには関係なく腹のなかで何かがいうのですからしかたがない。

懐爺にいわせると、それは、

【はらむし】とか、

【ふくせいちゅう】とか、

【はらことば】とか、いわれるおぼけだそうです。

そいつを退治するには、年に一回のお祭りのときに村長さんの家でしか食べたことのない米の飯を、毎日腹一杯食べなければいけないそうですから、退治するのはとても不可能（ふかのう）です。

ぼくの家のご主食は、芋類か麺類でした。

さつまいも、じゃがいも、さといも、やまいも、うどん、きしめん、にほんそば、ちゅうかそば。

おかずは一切ありません。

だから牛肉とか鮮魚とかは、おとなになるまでぼくは食べたことがありませんでした。

春夏秋はまだいい。

躑躅峠（つつじとうげ）で土筆（つくし）がとれるし、小山で桑の実がとれるし、小川でざりがにがとれるから、そういうものをおかずにし

ていました。

けれども冬は何もとれないので、雪に塩をふりかけておかずにしていました。

飲み物は、井戸水を湧かした白湯で、これは何杯飲んでも飽きない。

学校で食べるお弁当のなかみは、必ず干したものでした。

干し芋、

干し柿、

干し梅、

干し瓜、

干し蝗、

干し蛙、などです。

干したものは滋養（じよう）があるんだと母親はいていましたが、つまりはお金がぜんぜんなくても、用意できる食べものだったのです。

週に二回、米軍基地（べいぐんきち）から払い下げられた、脱脂粉乳（だっしふんにゅう）がでますが、これをのむと必ず下痢（げり）になりました。

ときどき隣のお姉さんから、白いごはんと牛乳をもらいますが、ぜんぶ（我が家で飼い始めた）【ねこまた】にあげてしまいます。

口にしたくないわけではなく、そういうものを口にしたら、ふだんの食事やお弁当や脱脂粉乳を、二度と口にできなくなりそうだから、やめておくのです。

そんなこんなで栄養失調のぼくは、とうとう骨の病気になりました。

この骨の病気というのが奇妙で、栄養がないわけですから骨が欠けたり、なくなったりするならわかるのですが、骨が増えるのです。

あちこちの骨が増えて、いくつも瘤（こぶ）ができました。

触ってみると硬いので、その瘤のなかみは、脂肪でも水でも血でもなく、まちがいなく骨なのです。

この瘤が背中にできて大きくなると、怪物図鑑（かいぶつずかん）で垣間（かいま）見た〈怪奇せむし男〉になるんだそうで、心待ちにしていたのですが、残念ながら背中にはできませんでした。

もちろん病院にはいかず、懐爺に相談にいきました。

そのとき懐爺は、樹皮（じゅひ）を齧（かじ）っていました。

聞くと、懐爺の食事は、
樹皮と、
花卉と、
雑草と、
虫類と、
雨水と、いうことですから、ぼくのほうはずいぶんましです。

「それは【ほねほね】というおぼけですね」

懐爺は気の毒そうな表情をしていました。

こころなしか泪目にすらなっています。

「【ほねほね】たあ、ちっともこわくないなまえじゃのう」

「名前はこわくはないが、【ほねほね】はなかなかやっつけるのが難しい。
ふだん肉とか魚を食べないこどもは、よくこの【ほねほね】にやられます。
でも、やられてから肉とか魚を食べても、もうおそいのです」

それで懐爺は気の毒そうな表情をしたのでしょ

「じゃあわしは【ほねほね】と、いつまでもなかよくくらすしかないの
う」

ぼくは半分自棄気味（やげぎみ）になっていました。

「仲良しならいいですが、【ほねほね】はいじわるなところがありますか
ら、ときどき烈しく痛みます」

また気の毒そうな表情。

「いたいのはいやじゃのう」

「かわいそうですねえ。でも都合よく、丸薬（がんやく）があります。
それを飲めば退治はできなくても痛みはでません」

なんだ、ぼくは気の毒なんかじゃないではないか、とおもいました。

「そのがんやくを、はようくれや」

「すこし待ってくださいね。いま持ってきますから」

懐爺は祠に消えた。

再びでてくると、掌（てのひら）を開きます。

黒い小さな丸い粒がひとつ。

「まるで、はなくそじゃのう」

「これが丸薬です。さあ、水なしでどうぞ」

飲んだ。

まずい。

「かいじい、わしに、はなくそをのませたじゃろう」

正直な感想でした。

「失敬（しっけい）な。わたしは鼻くそなんか、たまらない体質なので
す」

「そうかのう。はなくそのあじがしたがのう」

いずれにしても、その後ぼくの【ほねほね】は、痛むどころか、ひとつ
つつ消えてゆきました。

そして現在は、右手の親指にひとつ残っているだけです。

どこかにぶつければ激しく痛むのですが、そうでなければ痛むことも
ありません。

まったく懐爺のおかげですが、実はぼくはいまでも、あの丸薬は懐爺
の鼻くそだったのではないか、と疑っています。

ぼくに鼻くそをのませることになるとおもって、懐爺は気の毒そうな
表情をしたのだらうと、そんな推測（すいそく）もしています。